松田宏一郎著『江戸の知識から明治の政治へ』

（ぺりかん社・二〇〇八年）

苅部　直

一

本書の著者は、かつて坂本多加雄の論文集『市場・道徳・秩序』（創文社、一九九一年。新版は、ちくま学芸文庫、二〇〇七年）を読んださい、「こういうことは書いてはいけないのかと思っていた」と感じたという。坂本の次の著書『日本は自らの来歴を語りうるか』（筑摩書房、一九九四年）に関する書評に見える言及である（『よむ』三十九号、一九九四年六月）。書いてはいけないこととは何か。坂本の姿勢に深い共感をよせながら、著者は、それまでの研究に見られる「業界論理」（これが著者の表現だが、あるいは業界倫理と呼ぶべきだろうか）を、こうまとめていた。

何しろ明治期以降を扱った日本政治思想史の論文というのは、学問的な密度に精粗はあれ、だいたいはヘーゲル主義（マルクスもその一部として）と共和主義とピューリタニズムの奇妙な混合体が普通であって、評価すべき思想はこの三つに適合しているかのように記述され、批判される場合はこれらのどこにあっていないかを説明するというのが、その隠された規範であった。

著者は「日本政治思想史」と表現していたが、政治以外の、近代日本思想史の研究分野にも、同じ傾向がしばしば見られることを、意識した上での指摘だろう。この発言から十四年がすぎたいま、日本の近代思想史に関する研究は、ここに見られる傾向を、どれだけ脱しているのだろうか。本書に見える以下のような記述からすると、著者の現状認識は、いまだ明るくはないようである。

これまで一般的には、西洋における一九世紀的な「文明史」観と社会進化論の輸入が、明治初期の「文明」論を基礎づけていたと理解され、その強い流れに対抗して、いかなる思想が歴史法則に対する個人の自由意志や「主体性」をよりよく堅持し得たかといった論点に、思想史研究の関心が集中することがあったと思われる。（第二部第二章「『文明』『儒学』『ダーウィニズム』」、本書二一六頁）

「国家目的としての『富強』の追求」によりそう、いわば体制派の潮流に対して、それを批判する「主体性」を世に示した思想家たちに高い評価を与え、その系譜づくりに努めること。しかもその「主体性」は、「いわゆる政治的意欲を内在させた市民」が「政治的議論の場」を構成するという、西洋の「共和主義的理想」（一一七頁）としばしば結びつけられ、そうした

理想の「本質」（二八三頁）にどれだけ近づいたかが、思想の意義を論じるさいの、暗黙もしくは露骨な前提とされてしまう。

同じような思考枠組は、これを屈折させた形で、研究者による「アジア主義」評価にも見られると著者は指摘する。第二部第一章「『亜細亜』の『他称』性」では、徳川時代の論者から、福澤諭吉に至るまで、十八・十九世紀の日本の思想家たちが、そもそも西洋人によって勝手に規定された「亜細亜」概念への違和感を前提として、日本・中国・朝鮮の三者の関係を位置づけようとした営みを跡づけている。注でとりあげる竹内好（二〇六頁）を筆頭とするような、「素朴な反西洋意識と素朴なロマンティシズム」（一九九頁）に基づいた「アジア主義」賛美に対する、著者の周到な批判である。

こうした「共和主義的理想」や「反西洋意識」の思想上の価値を、著者はまったく否定するわけではない。問題にしているのはむしろ、そうした思考枠組に基づいて、過去の思想を整理することだけを、研究者の至上命題とするような傾向だろう。過去の日本思想の世界は、そうした枠組ではこぼれ落ちてしまうような、さまざまな問題が交錯する領域であり、その内にある交流や葛藤を分析し、個々の思想の意味を考える営みは、もっと多様であっていいのではないか。この大らかな批判意識が、著者が積みあげてきた研究を支えている。その仕事が、このたび単著にまとめられた意義は大きい。それを考えると、不遜な物言いをあえてすれば、本書の題名は、もっと派手なものであってもよかったのではないか。

二

本書の全体を通じて、著者の視線は、徳川思想と明治思想との連続性に向かう。先にふれた、先行研究の「業界論理」が、近代になって西洋から受容された（あるいは受容されるべきだった）理想の意義に焦点をあてていたことに対する批判の姿勢からすれば、当然の選択と言ってよい。

この特徴がもっともはっきりと表われているのは、福澤諭吉の思想を論じた、第一部第四章「福沢諭吉における知の『分権』」であろう。ここで著者は、福澤の『学問のすゝめ』や「学者安心論」（一八七六年）に見られる表現を綿密に分析して、その秩序像は、西洋の社会契約説・統治契約説をなぞったというより、徳川時代以来の「公・私」観との連続性が強いと説く。政府による統治も人民の社会生活も、ともに全体秩序を支える「職分」の一種としてとらえ、人民の行為の中にも、部分空間での「おおやけ」の機能を担うものがあるとする、伝統的な発想に基づいて、福澤は政府と人民との分業を説く西洋思想を理解した。重要なのは、これが西洋思想に対する誤解と言うより、むしろ日本と西洋との共通性に着目して考えた結果であったことである。

したがって著者によれば、福澤の考える国家像は、内部が等質で一元的に構成された国民国家では、決してない。それは

「各々が充実した『職分』領域の重層体としての『日本国』」（一五一頁）なのである。福澤が「分権論」（一八七七年）で、アレクシ・ド・トクヴィルの著作を間接的に引きながら、士族による地方自治を説いたのも、そうした秩序像の一環であった。地方への「分権」や「士族の気力」をめぐる同時代の議論を、著者が詳しく調べ、その討論空間の中に福澤の言説を位置づけているところも、教えられることが多い。

ただ、第二部第三章「『封建』と『自治』、そして『公共心』というイデオロギー」は、徳川時代に見られる「公・私」観が、統治秩序の上位者から、下位者が任務を「預かり」「引き受ける」という観念と結びついていたことを指摘している（二五一頁）。そうすると、重層的な全体秩序の中で、村落や商家や学校といった下位の秩序体も、それぞれの内の小空間で「おおやけ」としての機能を担うという、前近代以来の発想を、福澤がひきついだのは確かだとしても、これに伴う上下の委任関係と、個人の「独立自尊」という大命題とを、「気風」の問題としてどのように両立させていたのか。その点に疑問が残ったが、これはむしろ、今後さまざまな福澤研究者によって、追求されるべき課題であろう。

このように、明治時代の人々が、徳川時代の思想を「意識的に参照するにたる思考の蓄積」（六頁）と見なし、その基盤の上に立って議論を展開していたようすを明らかにする作業は、本書の第二部「アジア認識と伝統の再構成」で、同時代の中国・朝鮮の思想との比較も試みながら、正面切って展開されている。そのうち、「亜細亜」認識をめぐる第一章の分析についてはすでにふれた。第二章「『文明』『儒学』『ダーウィニズム』」では、人間性と「文明」との関係をめぐる徳川時代の言説の延長線上に、明治以降の、西洋の「文明」論や社会進化論の受容を位置づけている。第三章「『封建』と『自治』、そして『公共心』というイデオロギー」は、さらに大胆に、考察の範囲を昭和戦前期にまで広げ、中国古典の概念に由来する「封建」の語が、その内容を変えてゆき、近代においては望ましい地方自治の「気風」と結びつけて理解されるようになった経緯を明らかにする。

明治時代の思想を、徳川時代の思想の蓄積の上に置いて理解する方法は、冒頭でとりあげた坂本多加雄や、前田愛、宮城公子、松本三之介、米原謙といった、より年長の研究者たちが試みてきたものではある。しかし、ここまで方法論上の自覚を明確にし、扱う対象の幅を広げたのは、著者が初めてだろう。本誌前号（第三十九号）の特集「近代の漢学」にもまた、同じような問題関心が窺え、今後さらに盛んになる研究の方向を示している。もはや、徳川時代の思想に関する知識が不十分なまま、明治時代の思想を研究することは、許されなくなった。

三

しかし、前近代と近代との断絶に着目する従来の研究動向を

批判し、二つが連続する側面を指摘したというだけでは、本書の意義の半分ていどを語ったことにしかならない。もっと重要なのは、徳川時代の後期から明治時代を貫いていた、大きな思想課題を明らかにし、それを軸として、思想史上の十九世紀像を描きなおしたことにある。

その作業は、福澤論を含む第一部「統治エリート観における伝統と近代」で見ることができる。特に、第一章「『政事』と『吏事』――徳川期の統治と人材」と第三章「エリート形成と能力主義の定義」とが、著者による歴史像を概観するのに都合がよい。統治のための「人材」をいかに育て、集めるか。すでに十八世紀末から、行政需要の増大や防衛上の危機感の高まりを背景にして、この課題が焦点となっていたことを、高野余慶、柴野栗山、會澤正志斎といった儒者たちの議論から明らかにし、その系譜が佐久間象山をへて、福澤諭吉による「実学」構想につながると説明している。

他方で、"state affairs"の増大と複雑化にどう対処するか、その解決に有用な人材をどうやって育るかという問題は、まさしく同じ時期のヨーロッパでも、盛んに議論されていた事柄であった。著者は英国における言論状況と、エドマンド・バーク、ジョン・スチュアート・ミルらの言説を詳細に探り、思想史上の並行現象を明らかにしている。十九世紀日本における西洋思想の受容は、「文明」後進国による先進国の模倣という性格に尽きるものではない。日本でも、西洋と同じ思想課題について議論の蓄積がすでにあったために、異国の思想を熱心に学び、みずからが直面する問題を考える糧にしようとした。そうした西洋と日本との思想の共鳴現象を指摘し、その上で、課題の解決方法がどのように岐れたかを検討する。狭い意味の日本思想に限られない、国境を越えた議論の空間へと、著者は視野を広げるのである。

また、人材育成をめぐる問いは、実用にむけた知識の専門分化と並行して、そうした技術知をこえて、総合的な判断力を養う「教養」の必要性をも、鋭く意識させるようになる。そのことは、ひるがえって、思考と実践、人格と技術、徳と知恵のそれぞれを両立させるような、新しい思考方法の探求へと、思想家を向かわせるだろう。第一部の第二章「朱子学・正学・実学――佐久間象山」は、象山と福澤の唱えた「実学」に関して、その過程を明らかにしている。「あとがき」で著者は、この本は「政治思想家研究」ではないと断っているが（二八三頁）、この章に関しては謙遜ととるべきではないか。人材論という言説の潮流が、個々の思想家の思考の深部にまで変化をうながし、新しい考察を準備させるようすが、そこでは鮮明に描かれている。

明治初期まで、こうした人材論は、福澤の学者職分論や地方分権論に見られるように、社会制度の全体構想とからみあわせて、知識の育成の場について考えるという、大きな視野で議論されていた。しかし明治二十年代以降は、一定の「道徳」の普及のみに期待する傾向が、明治政府のみならず、それに対する

批判者の側でも主流になる。その結果、徳川時代以来の人材論がもっていた豊かさは失なわれ、一定の徳目の注入によって問題をすませようとする議論へと「退行」（九九頁）してしまった。それが著者の見立てである。

明治政府に対する反対派もまた、「道徳論」へ「退行」した動向の典型例として挙げられるのは、中江兆民の政党論である。その「道学的」傾向（一〇〇頁）に対する著者の批判は手きびしい。兆民研究者からは、きっと激しい異論が続出することだろう。この点について評価を下すには、著者による兆民論、また明治二十年代論の本格的な展開をまたねばならないが、「序」に見える、明治後半期以降の思想家たちに対する、著者の深い疑念が、この批判に関連していると見た。――徳川時代の思想家に比べ、「思考過程で発生する違和感やすわりの悪さを丁寧かつ適切に表現することがあまり上手くない」（八頁）。

現実の複雑な問題に直面したとき、あるいは、異質な文化との対決を迫られたとき、すでに持ち前の思考枠組を無理にあてはめたり、あるいは新しい枠組に安易にのりかえたりするのでなく、「違和感やすわりの悪さ」を見つめながら、少しづつ問題を考えてゆく。本当の意味で意義ぶかい思想は、そうした考察の現場からしか生まれない。そのことを、人材や「文明」「亜細亜」をめぐる徳川時代・明治初期の思想は、また、本書全体の語り口は、示しているように思える。

（東京大学教授）

昆野伸幸著
『近代日本の国体論』
（ぺりかん社・二〇〇八年）

長谷川亮一著
『「皇国史観」という問題』
（白澤社・二〇〇八年）

梅森　直之

はじめに

二〇〇八年は、日本思想史の研究において、「国体論」や「皇国史観」に対する新しい議論の始まりとして記憶されることになるかも知れない。私がこのように記す理由は、当該の主題をめぐる本格的著作が、ほぼときを同じくするかたちで本年相次いで公刊されたからである。昆野伸幸『近代日本の国体論』、長谷川亮一『「皇国史観」という問題』は、いずれも新進気鋭の研究者が、当該の主題に対し正面から取り組んだ力作である。当該の主題を論ずるにあたり、これまで、必ずしも十分に論じられてこなかった人物やテクストを発掘し、新しい角度